

## F. モウェット著 『狼が語る ネバー・クライ・ウルフ』

日本では狼は絶滅してしまったが、かつて狼は「大神」や「大<sup>おお</sup>口<sup>かみ</sup>眞神」として崇められた益獣で、人とも親しい共生の関係を結んでいたらしい。農民にとっては狼は田畑を荒らす猪や鹿を退治してくれる守護神でもあった。秩父の三峰神社や奥多摩の御嶽神社の眷属（神の使い）が狼であることは、その御札にも描かれていてよく知られている。

当時の日本では、狼は自然の生態系の維持に重要な役割を果たし、狼が餌とする動物達にとっても長期的に種族の維持をもたらす相手であって、そのような関係を人もよく知っていたから、それゆえ神格化されて崇められてもいたのであろう。

しかし、狼は開発によって住む場所を奪われ人里に出て来て家畜を襲うようになった結果、害獣として駆逐され、また海外から入ってきた狂犬病などに感染して殺害の対象となって、日本では百年以上前に絶滅してしまった。

北米でもスポーツハンターや狩猟業界のロビーストの圧力で、「狙う獲物のカリブーやバッファローが減ったのは狼が彼らを食い荒らしたからだ」と政府の狼大量殺戮作戦の犠牲になって絶滅の危機にあるらしい。さて。

この本は、カナダの生物学者が政府の狼棲息調査の仕事で北極圏の狼棲息地帯に単独で入り込み、狼の一家と共に過ごした体験記である。狼は一夫一妻制で子供を合わせた数人（匹）で家族を作って生活しているようで、家族の愛情もこまやかならしい。狩などは数家族で共同して行ったり、片親が病気や人間に撃たれて亡くなったりした場合には、隣人家族が子供の面倒を見るなど、その社会性も豊かであるようだ。

イソップ童話の「オオカミが来た！」や狂犬病への感染などによって、狼は人を襲う残忍冷酷な怖い動物というイメージが出来上がったらしいが、この本によると、狼は生きて行く上で必要最低限の餌を狩るだけで、それはまた食物連鎖を適正に保つ役割も果たしているようだ。

著者は調査対象動物への環境変化を与えないように匍匐前進してできるだけ狼の巣に近づき、彼らの生態を長期間にわたって観察した結果、彼らは世情言われるような残忍な動物ではなく、何とも温和で優雅で、しかも知的で控えめな動物であったそうだが、狼絶滅作戦のための生態調査としての政府側の期待値とはまるで逆な結果であったことは皮肉なことであった。本書の書影（上）に掲載された狼の顔をご覧ください。犬好きでなくても惚れ惚れするような素晴らしい風貌ではないか。

小林正佳訳 築地書館 2014 年刊

